

取材メモ



5日に熱戦の火ぶたが切られた第107回全国高校野球選手権大会。その予選となる福島大会で準優勝した会津北嶺(会津若松市)は大会期間中、ひととき大きな存在感を放った。会津勢40年ぶりの決勝進出に地元住民や県内の高校野球ファンは熱視線を送った。創部8年目で決勝まで駆け上がった強さの理由を探った。(会津若松支社報道部・亀山 美波)

■再スタート

会津北嶺の前身の若松一は1959(昭和34)年に創部した。2002(平成14)年に部員不足を理由に休部していたが、2018年に会津北嶺として再出発した。翌年から県外の選手

会津北嶺の準優勝

野球に打ち込める環境を求め、大きな志を抱いて会津に集まった。

■豊富な指導者

練習環境も恵まれて

いる訳でない。学校の敷地内に野球部が練習できるグラウンドはない。選手は毎日約8キロ離れた市内の河東野球場に自転車で行く。そんな中、会津北嶺に打ち込む子どもたちにとって目標と励みになる。

会津勢活躍に熱視線

会津勢は喜多方が1959(昭和34)年に



練習試合に汗を流す会津北嶺の新チーム＝4日

指導者の豊富さだ。非常勤のスタッフも含めると9人。投手、打撃、内野守備、外野守備、走塁、戦術など、それぞれが得意とする専門分野を選手に丁寧に指導する。より細かく充実した教えを受けられることで、選手の潜在能力が十分に引き出されている。

■頂を目指して

只見の2022年の選抜高校野球大会(セ

さて、会津勢悲願の夏の甲子園出場を果たすのはどのチームか。各校が切磋琢磨し、頂をつかむその日を心待ちにしたい。